

戦争と平和

理事 鈴木 三郎

1. 21 世紀とは

21 世紀の幕開けの年 2001 年を迎え、新しい世紀にたいし、より豊かで安全な世の中になつて欲しいとの希望を託した声が聞かれる。過ぎ去った 20 世紀は、驚異的な科学の進歩があった反面、悲惨な戦争の世紀でもあった。この声は、20 世紀の反省の上に立った人類の願望の心情ともいえるべきものである。もし、人類が、21 世紀も 20 世紀と同じような行動をとるとすれば、人口、食料、エネルギー、環境問題はさらに悪化をたどり、人類の生存により深刻な様相を呈することになる。

一方、科学の進歩は、科学が進むにしたがって益々その速度を速め、留まるところを知らない。また、世界の人口の増加はよほどのことがないかぎり、現在の 60 億人が 2025 年には 80 億人、半世紀後の 2050 年には 100 億人に達することはほぼ確実といわれている。豊かさを求める人間にとって食料やエネルギーが不足する時代になれば、民族なり国家による資源の奪い合いが起こり、それがまた悲惨な戦争につながるということも想像に難くない。したがって、21 世紀は、人類の生存の上で、これまでにないもっともクリティカルな岐路に立たされた世紀であるように思われる。

2. 人間はなぜ争うのか

人間の歴史をみるに、個人、家族、部族、国家といったあらゆる階層において、いつの時代でも争いが起こり絶えることがない。なぜ人間は争うのであろうか。個人でいえば、金銭的な争い、感情のもつれ、面子のこだわりなどいろいろな要素が重なり合って喧嘩になり、最悪の場合は殺し合いともなる。部族や国家となれば、自分たちの生存あるいは繁栄のための土地、食料、資源の確保ないしは獲得での争い、権威や思想の堅持のための弾圧あるいはジェノサイド、これらが昂ずれば大量の殺戮を伴う戦争となる。

一方、人は個人としても、また、集団としても、平和な家庭、町、国家の実現を望み、お互いに協力し、助け合っており、この面から見れば、人間

はあながち闘争を好むものではなく、友愛的な心情を持った生物ともいえる。なにがこのような二面性をもった行為にはしらせているのであろうか。

3. 戦争と共生

最近のバイオテクノロジー、とくに、遺伝子の研究とその応用には目を見張ることが多く、興味を引かれると同時に自然の持つ偉大さに驚嘆せざるをえない。クローン羊の誕生や、遺伝病の塩基配列の発見による遺伝子治療、塩基配列を組み替えて品種改良を行う遺伝子組み替え農作物など枚挙に暇がない。遺伝子の解読によって生命の謎が少しずつ分かってきたのであるが、解読が進めば進むほど生命の仕組みの不思議さに心を打たれる。われわれが無意識のうちにしている呼吸や心臓の鼓動は、ホルモン系や自律神経系などの自動的活動によるもので、この活動を支配しているのが遺伝子であるという。しかも、この遺伝子はみごとな調和のとれた動きをしており、到底人間業ではない。まさに、人間をはじめ大自然は「サムシング・グレート」による贈り物といわれる所以である。

この地球上に生命が誕生したのは 36 億年前といわれている。その頃、DNA が地球上で奇跡的な偶然によって自然発生し、自分のコピーを作るプログラムを持った DNA が現れ、これが地球最初の生命たる単細胞生物を生んで増殖をはじめたという。以来、生物は増殖を重ね、また、突然変異によって他の生物となり、さまざまな過程を経て進化の頂点たる今日の人間にいたっている。時代の新旧にかかわらず、また、動物植物にかかわらず、その遺伝子 (DNA) による遺伝暗号は基本的に全生物に共通している。このことは、地球上のすべての生物は、太古の昔に誕生した単細胞の子孫であることを示すものであるという。

最初の単細胞から進化の頂点に立つ人間にいたるまで、生物は自分の生存と自分の子孫を残すための適応度を高める遺伝情報を蓄積してきた。繁殖期の動物に見られるオス同士の闘争や、生物が

他の生物の命を奪って生命を維持している食物連鎖などは、生物が適応度を高めるために不可欠な競争という遺伝情報を蓄積しているからである。しかし、この競争の中でも損得感情が働いている場合がある。徹底的に闘う場合もあれば、お互いが徹底的に闘えば自分も殺されるかもしれない、それならば、自分はその危険から逃げるという回避の行動がそれである。そこから1歩進んで、お互いが手を結び、身の安全を確保する共生という展開もある。

社会を作るのは、人間だけの特質ではない。動物が群れや縄張りなどを作っているのは、動物も社会を作ることによって個体の適応度を高めているからだといわれている。人間も、地域、民族、国家などの集団による社会を形成することによって、個人の生命を維持し、子孫を残すための適応度を高めているといえる。太古の昔から生物が蓄積してきた遺伝情報、とくに、競争と共生の遺伝情報を人間は受け継いできているので、人間社会は、本質的に、この競争と共生の世界から抜け出すことができない。

4. 戦争と平和

人間の歴史は、争いの歴史といっても過言ではない。東の間の平和があっても、時が経ち人が変わ

れば争いが起きている。人間は他の動物と違って創造力がある。この創造力が人類にとって幸をもたらしたと同時に不幸をもたらした。火を作り、武器を作り、科学を発展させたことが、人間の生活をより豊かにした反面、一旦争いが起きた場合は、その規模や悲惨さは昔の比ではない。それだけに、平和を願う気持ちは益々高まってきたといえよう。

犬や猫と対面し、彼らの目をじっと見つめると、彼らもわれわれの目をじっと見つめ、お互いが親愛の情をもって見つめ合うことがある。このことは、動物と人間のDNAの遺伝情報に共通の部分があって共感を覚えるからではないかと思われる。われわれ人間は同じ種であり、言語や文字、通信といったような情報伝達の手段をもっているので、近親感を覚えるとしたら、動物と人間の場合よりもはるかに深い共感を覚えるはずである。

戦争は、人類のもって生まれた業のようなもので、人間社会から無くすことはできないにしても、一方の共生共感の遺伝情報をより多く活性化することによって、すこしでも長い平和な時期を持ちたいものである。

**(株)東芝社友、元(株)芝浦製作所(現
芝浦メカトロニクス(株))社長**

